

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2011年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	英米文学 専攻
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程2年	小笠原 清香 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	文学研究科・教授	新妻 昭彦 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	人文	<b>個人・共同の別</b>	個人
<b>研究課題名</b>	中英語期から19世紀の韻文における fast を中心とした副詞の多義性の通時的考察		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程2年	小笠原 清香	
<b>研究期間</b>	2011	年度	
<b>研究経費</b>	200	千円	

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、強意副詞の意味変化における規則性について、主に変化の方向性と意味拡張の範囲を明らかにすることを目的とした。「強意」および「速(早)く」という語義を持つ副詞の類義語群における通時的意味変化と、意味の曖昧化の分析を通して、認知言語学の知見を援用しつつ、副詞の多義構造を放射状カテゴリーとして表した。従来 Stern に始まり Traugott らを中心に単一方向性の意味変化が強調されてきたが、史的事実が示すことは、単一方向性ではなく、双方向性の変化である。中英語期から初期近代英語期のテクストにおける言語使用状況の分析を行い、こうした副詞の双方向性の意味変化の過程に観察される放射状カテゴリーの形成と、意味変化に作用していると考えられるメタファー・メトニミーといった認知的側面および言語使用という語用論的側面について考察している。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 強意副詞 } { 意味変化 } { 認知意味論 }

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度の研究は、これまで行ってきた副詞 **fast** を中心とした強意副詞の通時的意味発達に関する研究を基盤とし、意味変化を引き起こす認知語用論的側面について考察することを目的として取り組んだ。前年度までは、主に中英語から初期近代英語にかけての韻文・散文を研究対象に、テキストに密着しながら語義の決定と多義的な解釈の可能性について考察をしてきたが、**fast** の中英語期における強意副詞としての多様な意味用法の分析を経て、今年度は **hard** をはじめ、**fast** に類似した類義語群に着目し、意味変化の規則性および意味発達の方向性について考察を重ねた。

5月20日に福岡女子大学にて開催された近代英語協会第28回大会では、「**fast** の多義性と意味領域の変化—中英語期と近代英語期を中心に—」というタイトルで、学会発表を行った。この発表では、これまでの研究結果を踏まえ、中英語期と初期近代英語期における使用法を考察するため、中英語期の4詩作品および **Shakespeare** の全劇作品とソネットを対象に、主に共起動詞の種類の変化について分析した。この発表を通して、本来は意味、内容を有した語であっても、強意語として使用されるようになると、言葉自体の意味が抜け落ちてしまい、ゆえに強意語は時代とともに流行り廃れの激しい性質を帯びているという強意語の特質を考察することができた。また、新たなアプローチとして、認知言語学的視点からの考察を取り入れ、**fast** の事例を対象に、意味は空間用語から時間用語へと変化するという一つの可能性を検討した。

7月9日に行われた立教大学の英米文学研究方法論 II という学内発表においては、「副詞の意味領域の変化と多義構造—**fast** と **hard** の通時的意味変化を通して—」という題目で研究発表を行った。この発表の主な目的は、5月までに行った **fast** のテキストに基づく意味分析から見えてきた、副詞の多義構造について解明することであり、**fast** の意味変化と近似した通時態および意味構造を持つ副詞 **hard** を取り上げ、メタファー・メトニミーといった認知的側面が、意味変化に及ぼす影響を考察した。本発表で得られた有益な研究結果は、こうした認知言語学視点から見えてくる副詞の多義構造を放射状カテゴリーとして視覚的に説明することができたことである。意味が曖昧化する用例の検討を行いながら放射状カテゴリーを描くことで、「迅速」「固定」「不動」「密着」といった異なる意味領域がメタファー・メトニミーの働きにより相互に交換可能な語義として存在していることを明らかにした。

具体的には、**fast** の原義である“**firmly**”といった「固定・不動」の概念を表す意味はメタファーによって精神的な態度を形容するようになり、中英語期になると主に強意副詞として多種多様な動詞と共起するようになる。また同時期に原義である「固定・不動」の意味から「物理的な密着状態」の意味が生まれ、この密着状態は単一の意味領域内において働くメトニミーの働きによって“**close**”といった「空間的近接」を表すようになり、この「空間的近接」は、今度はメタファーによって時間的意味領域へ転移し、“**Soon**”といった「時間的近接」の意味を持つ。そして“**soon**”（「すぐに」）という意味は“**rapidly**”（「速く」）といった物理的速度の意味と「速（早）さ」という単一の意味領域内においてメトニミーで繋がる語義である。**hard** の放射状カテゴリーも、「速く」という語義が発達しきらなかったこと、そして **fast** にはない「難しく」という語義が強意副詞の意味から発達したことを除き、近似した放射状カテゴリーの形成が見られた。上記の研究内容は、さらに **fast** と **hard** の通時態分析も加え、2011年度『英米文学』に「**fast** と **hard** の意味拡張とその制約—通時態と意味構造の考察を通して—」という題で論文として発表した。

また、11月19日に上智大学にて行われた第77回チョーサー研究会では「意味領域の変化と拡張—強意の副詞を中心に—」という題目で研究発表を行った。この発表では、主に **fast** と **hard** の通時的意味変化に観察される放射状カテゴリーの形成を前提に、テキストの用例の中で語義が曖昧化する例についての検討を行った。

## 研究成果の概要 つづき

本発表では、メタファーによる意味領域の転移が顕著な例として、“The nyght was short and faste by the day”(The Canterbury Tales. Kn. 1475-79) などを取り上げ、例えば本用例に関しては、*faste by* は他の用例において空間的近接を表す際に用いられるコロケーションであるにも関わらず、例外的にこの 1 例のみが時間的近接を表すために *faste by* を用いている。こうした例から時間的意味領域と空間的意味領域がメタファーにより相互に交換可能な語義であることが理解でき、使用法の転用について検討することで意味変化を起こす認知的要因を考察した。

*fast* と *hard* を中心とした研究結果の集大成として、12 月 3、4 日に大東文化大学にて開催された日本中世英語英文学会第 27 回大会では「*fast* の意味領域の変化—中英語期から初期近代英語期を中心に—」と題して研究発表を行った。この発表では通時態の考察に始まり、用例分析においては新たに 15 世紀後半を対象に入れ、Vinaver の *The works of Sir Thomas Malory* における *fast* の意味用法も考察した。さらに先行研究の批判検討を行い、主に Henry Bradley(1904), Gustaf Stern(1975) など古典的研究において論じられ、Traugott and Dasher(2002) においても踏襲されている、「固定」から「迅速」、「速く」から「すぐに」などの単一方向の意味発達について、これらを史的事実は裏付けないことを論じ、今年度の研究で明らかとなった意味変化における放射状カテゴリーの形成と、異なる意味領域を繋ぐメタファー・メトニミーの存在について論じた。

今年度の最終的な到達目標は、*fast* と *hard* において行った個別の研究から、研究対象を強意副詞であり速度・早さの意味を持つ副詞へと拡大し、強意副詞の意味変化における規則性について検討することであった。12 月 7 日に立教大学において開催された 2011 年度立教英米文学会では、「副詞の意味変化—“Unidirectionality”再考—」と題して発表を行い、意味変化における方向性と強意副詞の意味変化の特質について考察した。『立教レビュー』において発表した“An Aspect of Adverbs in Semantic Change: A Tendency of Intensifiers”の主なテーマであった *swithe*, *rathe*, *wightly*, *quickly*, *nimbly*, *smartly*, *snell* といった類義語群の通時的意味変化に共通する強意と迅速の概念の相関性について論じ、1 年間の研究結果を通して、意味変化は単一方向性ではなく双方向性に起こることを論じた。顕著な例として *quickly* などを取り上げ、その意味発達において「すぐに」という時間的接近の意味派生が先であり、1 世紀ほどの間隔を隔てて、「速く」という物理的速度の意味が現れることを一つの根拠として提示した。

また、この発表は強意副詞の意味変化を中心的テーマとしたが、古英語期から中英語期にかけて一般的な強意語であった *swithe* と、中英語期から 15 世紀後半にかけて広く強意語として用いられた *fast* について、それぞれの使用状況を時代別のテキストに基づき共時的に考察した。この研究では、強意副詞は速度の意味を持つようになる傾向があること、そして *swithe* と *fast* はどちらもまだ意味が固定していない強意副詞として広く使用されていた時期に、*as* との連語表現において“*as soon as*”という意味で慣用的表現として用いられていることが分かり、このことから強意語自体が内包する意味特質として、迅速の概念が含まれるのではないか、という一つの可能性に迫った。

今年度の研究内容は、*fast* と *hard* の個別研究から、強意副詞の意味変化へと発展し、さらに *as* と強意語の連語表現の意味変化という新たなテーマが生まれた。比較的最近の先行研究では Traugott and Dasher(2002) などを中心に、歴史語用論において、主に法助動詞や接続詞の意味変化がメタファーやメトニミーという観点から論じられることはあったが、コロケーションや言語使用という語用論的側面を加えて論じた研究は今のところ見当たらないと思われる。強意副詞と *as* のコロケーションが表す意味とその意味変化を認知的および語用論的側面から考察することで、意味変化の規則性の一端を捉えることができた。

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

### ① 雑誌論文

- (1) 小笠原清香「fast と hard の意味拡張とその制約—通時態と意味構造の考察を通して—」  
『英米文学』第 72 号、2012 年 3 月、37-69 頁
- (2) Sayaka Ogasawara, *A Study of Semantic Relations and Change in "Rapid" Adverbs*. 『立教レビュー』第 41 号、2012 年 3 月、43-56 頁

### ② 学会発表

- (1) 小笠原清香「fast の多義性と意味領域の変化—中英語期と近代英語期を中心に—」  
近代英語協会第 28 回大会、2011 年 5 月 20 日、於福岡女子大学
- (2) 小笠原清香「意味領域の変化と拡張—強意の副詞を中心に—」  
第 77 回チョーサー研究会、2011 年 11 月 19 日、於上智大学
- (3) 小笠原清香「fast の意味領域の変化—中英語期から初期近代英語期を中心に—」  
日本中世英語英文学会第 27 回大会、2011 年 12 月 3 日、於大東文化大学  
板橋キャンパス
- (4) 小笠原清香「副詞の意味変化—“Unidirectionality”再考—」  
2011 年度立教英米文学会、2011 年 12 月 7 日、於立教大学